

## 語り声が記録になるとき

『表参道が燃えた日——山の手大空襲の体験記「増補版」』の重版に寄せて

山本 唯人

言を追っていると、「ボカア、やだね」が浮上する。高橋や三島のように、自分にかまけて死ぬわけにはいかない、とあの時野坂は、戦後ベビーブーム世代の若者に投げ掛けたのではなかったか。君らの自己否定はどこをむいているか……とも。〈自分にかまける〉ことに変わりはないが、「骨にからんでいる」自分自身を生きて「鳥のようにくりかえし……言わずにはいられない」と。

世界中に残る膨大な戦争体験の証言は、そこに〈無言〉を沈めて立っている、と思う。「あの日、十三、四歳以上だった日本人それぞれの胸のうち、ひとまとめに『記念』するなど土台無理。」と、言葉をつくし費してなお澱むものがあると、野坂はこうも〈証言〉する。「栄養失調の妹のかたわらで、かぶりついた夏のトマトの味は、決して苦くも辛くもなかった。あんなうまいトマトを、以後食べたことはないのです。」これら〈無言〉の継承を、体験記は求めている。

(さとう・いつこ) 山の手空襲を語りつく集い実行委員会

7月12日、港区青南小学校の体育館で「山の手空襲」八一周年追悼朗読と音楽の集いが開催された。1945年5月25日夜から、米軍によって東京西部一行われた「山の手空襲」の体験を次世代に伝えることなどを目的として、2016年より続く集まりである。コロナ流行による中断を挟み、今年で7回目になる。主催は山の手空襲を語りつく集い実行委員会、昨年から港区との共催になった。

この実行委員会の運営協力団体の一つとして、「表参道が燃えた日」編集委員会がある。2008年2月、『表参道が燃えた日——山の手大空襲の体験記』を刊行するにあたって、設立された本の編集グループである。編集委員会は、同年4月に同書の「2版」2009年8月に「増補版」を刊行した。さらに、2011年6月に『続表参道が燃えた日——山の手大空襲の体験記』を刊行し、今年の「集い」を機に、品切れになっていた1冊目の「増補版」の重版に踏み切った。

「集い」は第1回より体験記の朗読を軸

にしているが、それらは、『表参道が燃えた日』正(増補版)・続のどちらかより選ばれる。体験者とそれを受け継ぐ世代が参加する朗読と、聞く者たちの「声の響き合い」が「集い」の主役だとすれば、2冊の本は、



その場を縁の下で支える土台である。部屋の中から土台は見えないが、合わせて81編の体験記（座談記録を含む）を収めた、これらの本の存在感は大きい。

2冊の本の成り立ちにも触れよう。現在、表参道の交差点に「和をのぞむ——区政六十周年記念碑」という名称の記念碑が建っている。分かりにくい碑銘だが、これは、2007年1月、港区が「戦災により亡くなった人々を慰霊するとともに、心か



ら戦争のない世界の平和を祈ります」という趣旨で、空襲当時、犠牲者の遺体が積み上がったとされる場所の付近に建てたものである。この記念碑建立の前提に、山の手空襲の体験者や遺族、地元の関係者などによる署名運動があった。呼びかけは2005年8月に行われ、2006年3月、812人分の署名を集めて、区長宛に提出された。これを受けて、同年6月から港区赤坂総合支所の「区政60周年記念事業実行委員会」で案が練られ、建立が実現した。

この時、寄せられた体験記がきっかけになり、「文集」の発行が決まり、『表参道が燃えた日』の刊行につながった。戦後60年に挙げられた声が、記念碑から本へ、本から「集い」へと受け継がれ、泉のように、青山、表参道の地に湧き上がり続けているのである。

今回の「重版」という言葉には、すべての源である体験記の「継承」への思いを込めた。「重版」とは、従来のものをそのまま増やす「増刷」とは異なり、何かを添えて、版を「重ねる」ことを指す。世代が代わっても、体験者たちの声の豊かさを受け継ぐために、受け取った者は、それでも分かってもらう、工夫を重ねていかなければならない。その一步を踏み出す試みとして、表紙絵を描いた木村万起さんのご子息の衛

さんに、扉の短文を寄せてもらった。

体験記の行間から声が消えていくとき、そばにいた人の「重ねる」言葉は、文字たちを流れゆく記号ではなく、生きた記録としてよみがえらせる助けになるだろう。私自身も、何か力になればと、この重版から編集委員会に加わることになった。ぜひ一度、手に取ってもらえればと思う。

\*紹介・入手方法などは以下…note「表参道が燃えた日」編集委員会  
[https://note.com/omotesando\\_com](https://note.com/omotesando_com)

（やまもと・ただひと／「表参道が燃えた日」編集委員会）